

(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 兵庫県神戸市中央区加納町6-5-1
管理機関名 神戸市教育委員会
代表者名 教育長 長田 淳 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日（契約締結日）～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 神戸市立葺合高等学校

学校長名 新井 厚也

3 研究開発名

神戸から綾なせ世界、共生への扉を開くグローバル・リーダー育成

4 研究開発概要

葺合高等学校は世界5カ国に9校の姉妹校を持ち、交流事業を活発に行っており、海外の学校とインターネットを活用して、TV会議やディベートなどを実践している。そこで、これまでの取組をさらに発展させるために、まず「子供」をキーワードとし、「世界の共生」のために「人権」「環境」「経済」の3視点から学習し、活動を通してグローバル・リーダーとしての意識を育む。そして、大学進学後もさらに幅広く活躍の場を求める人材の育成を考える。そのため、本校国際科の1年時で世界を取り巻く諸問題を学習し、海外フィールドワークを行う。2年時では「世界の共生のために、私たちが子供にできること」の提言をまとめて姉妹校や海外の学校と協議し、さらに、現地に赴き共同で活動を開始する。3年時ではこれらの取組に基づき、「KOBÉ 四大陸高校生サミット at Fukiai」を開催して実践報告と討議を行い、共同提言を発信する。成果については定量・定性評価を行い、5年間の事業終了後もNPO活動を含め、継続した取組ができる体制を目指す。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① SGH 運営指導委員会の開催							18日			31日		
② SGH 推進支援チーム（委員会事務局）による支援	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
③ SGH 担当事務補助員の雇用及び葺合高校への派遣	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
④ 帰国・外国人教員の雇用及び葺合高校への派遣	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑤ 海外交流アドバイザーの雇用及び葺合高校への派遣	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑥ 神戸市立中学校教育研究会英語部会教科総会		11日										
⑦ 神戸市立高等学校教育課程研究協議会					3日							
⑧ 四大陸高校生サミットに係る支援	→	→	→	12・13日	→	→	→	→	→	→	→	→
⑨ 葺合高校へのALT 配当増	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑩神戸市長、副市長SGH授業見学			14日			6日						

(2) 実績の説明

①SGH 運営指導委員会の開催

「スーパーグローバルハイスクール実施要項」（平成26年1月14日文科科学大臣決定）における事業の運営に関して専門的な見地及び市民の立場から幅広く意見を求めることを目的として、神戸市立高等学校スーパーグローバルハイスクール運営指導委員会を設け、平成30年度は2回開催した（第1回10月18日、第2回1月31日）。

委員会において、(1)事業の内容及び研究方法に関すること (2)事業の研究成果と課題に関すること (3)成果普及と事業終了後の取組 (4)その他事業の目的を達成するために必要な事項に関すること等について、それぞれの観点から葺合高等学校の取組がさらに充実したものとなるよう、意見交換を行った。

②SGH 推進支援チーム（委員会事務局）による支援

首席指導主事、教科等担当主事及び指導推進担当課長を中心に構成した「SGH 推進支援チーム」において、以下のような支援を行った。

- (1) 文科科学省からの情報の提供 (2) 文科科学省へ同校の取組に関する連絡 (3) 他

の神戸市立高校・中学校への同校の取組の広報活動 (4)SGH 運営指導委員会の開催準備 (5)同校の実践に関する助言 (6)平成 30 年度開催の「四大陸高校生サミット」に向けた予算措置 (7)普及の場として、8 月開催の神戸市立高等学校教育課程研究協議会全体会で発表の機会の設定、また 5 月開催の神戸市立中学校教科総会英語部会における発表の調整。

さらに、兵庫県教育委員会主催の「ひょうごグローバル・リーダー育成推進懇話会」に学校教育課長が委員として参加し、県内 SGH 校、アソシエイト校との情報交換を行い、同校の取組がさらに充実したものとなるよう支援を行った。

③SGH 担当事務補助員の雇用及び葺合高等学校への派遣

葺合高等学校における事務作業（経理事務補助、資料作成・整理等）の負担軽減を図るため、非常勤事務職員を雇用した。

④帰国・外国人教員の雇用及び葺合高校への派遣

課題研究内容に関する専門知識を有し、単独で授業を実施できる「帰国・外国人教員」として、日本国際交流振興会に所属して、日本国内のみならず海外の学校や NPO との広いネットワークを有する者を雇用し、同校へ派遣した。

⑤海外交流アドバイザーの雇用及び葺合高校への派遣

海外の学校や機関との連携交渉のほか、SGH 事業の推進を目的として、1 名を雇用し同校へ派遣している。これまでも同校の国際交流事業等に貢献しており、年間を通して、SGH 事業の推進に従事した。

⑥神戸市立中学校教育研究会英語部会における研究発表

平成 30 年 5 月 11 日神戸市立中学校教育研究会英語部会教科総会の枠組みのなかで、「Super Global High School の取組」を題に、グローバル・リーダー育成の取組について研究発表を行った。

⑦神戸市立高等学校教育課程研究協議会における研究発表

平成 30 年 8 月に神戸市立高等学校教育課程研究協議会全体会の枠組みのなかで、「葺合高等学校 SGH 5 年間の取組」を題に、5 年間のグローバル・リーダー育成の取組と、その成果と課題についての研究発表を行った。

⑧四大陸高校生サミットに係る支援

平成 30 年度 7 月に開催した「第 3 回 KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」に係る海外姉妹校生徒・教員の招聘・滞在費用等の経費を予算措置した。SGH 指定終了後の平成 31 年度実施の「インターナショナル・コンファレンス」については、現在予算要求中である。

⑨葺合高等学校への ALT 配当増

SGH 指定に対する支援として、平成 28 年度に ALT を週 3 日の配当時間増としていたが、平成 29 年度より ALT 1 名増員とした。

⑩神戸市長、副市長 SGH 授業見学

久元喜造市長は「第 3 回 KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」直前のリハーサルの授業を、寺崎秀俊副市長はサミットの振り返りとなる内容の授業を視察された。その際生徒の英語力の高さと取組内容を高く評価されて、医療産業関係で現在神戸に滞在されている外国人関係者への対応や、今後の日本と国際都市神戸を担う役割を担う、グローバル人材育成への期待を表明した。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（契約日 ～平成 31 年 3 月 29 日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①幅広い知識について教科横断的に多角的な視点から学習活動を行うことにより、論理的・創造的な思考力を育てる。	→											
②外部講師による授業やワークショップに参加する機会を設けることにより、専門的な知識の習得と思考力の育成を図る	→											
③JICA や企業のインターンシップに参加することにより、能動的・主体的な実践力を育成する。				→								
④海外フィールドワークに向けての活動とフィールドワークの実践により、「人権」「環境」「経済」の観点から課題研究に取り組み、知識や思考力と実践力との融合を図る。【1年】	→											
⑤課題研究を広げ深めることで、プランニング能力、問題解決能力、高いコミュニケーション能力、経験と知識を高次元で融合させる能力を育成する。									→			
⑥各種コンテストへの積極的な参加を促すことにより、スキルのより一層の向上を図る。				→								
⑦四大陸の姉妹校を訪れ、「世界の共生」のための提言のプレゼンテーションを行い、現地高校生と意見交換をする。さらに「四大陸高校生サミット」を開催し、姉妹校の生徒と議論して「共同宣言」を行う。【2年・3年】	→											
⑧各種コンテストやセミナーで培ったスキルを用いて、イベント等を主催・運営し、言語運用能力に加えて企画力や交渉力、実践力を磨き、あわせて俯瞰的な視野を養うことでスーパーグローバルリーダーに必要な資質を高める。【2年・3年】	→											

<p>⑨研究成果の普及</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NPO 活動での提言の実践 ・普通科生徒への普及 ・サミット記録冊子の送付 ・課題研究交流会への全市立高生徒の参加 ・「神戸高校生サミット」 ・中学生への課題研究発表会 												
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(2) 実績の説明

研究開発の仮説、検証、結果

上記①～⑨の業務項目を実施することで、葺合高校が設定するグローバル人材に必要な「16の力」を育成することができるという仮説を立てた。「16の力」は以下の通りである。

- ①多角的な視点を持つ多面的で広い視野 ②柔軟性に富んだ問題解決能力 ③意見を論理的に主張できる能力 ④主張と協調性のバランスが取れる能力 ⑤強いリーダーシップ ⑥他者の痛みを理解し、サポートできる心 ⑦未来を見据えた目標設定ができ、かつそれを実現するためのプランニング能力 ⑧論理的思考力 ⑨デジタルツールを多面的に使いこなす能力 ⑩経験と知識を高次元で融合させる能力 ⑪フィールドワークを中心とした実践力と経験 ⑫自国の文化・歴史に関する深い知識と理解 ⑬他国の文化・歴史に対する理解と広い知識 ⑭高いコミュニケーション能力 ⑮高いディベート能力 ⑯高いプレゼンテーション能力

(詳細：研究報告書「V-2 SGHプログラムの検証」)

3年間のSGHプログラムの成果を測る目的で、SGH対象生徒の学年比較を実施した。SGH3期生における1年時と3年時のMAKSの平均値の比較を行った。

全ての項目において、1年次よりも3年次のほうが、平均値の値は高くなった。有意差が見られた項目は、①「ものごとを多くの角度から見る幅広い視野」、②「柔軟性に富んだ問題解決力」、③「意見を論理的に主張できる能力」、⑦「未来を見据えた目標を設定し、実現するプランニング能力」、⑩「自分の経験と学習した知識とを融合させて理解する能力」、⑭「英語でのコミュニケーション能力」、⑯「英語でのプレゼンテーション能力と理解」の7つであった。3年間で16の力が伸張したと言える。有意差の出た項目は、課題研究や国際協同学習等、経験の積み重ねの結果と考えられる。

また、GSの授業では、データ収集・分析・発表・意見交換など英語を使用する場面が多く、必然的に様々な英語に触れる機会が増え、その結果、英語力が向上した。具体的には平成30年と31年3月の卒業生においては、2年生終了時には学年80名の生徒の半数が実用英語検定準1級を取得、卒業時には約4分の3の生徒が取得した。

- ① 幅広い知識について教科横断的に、多角的な視点から学習活動を行うことにより、論理的・創造的な思考力を育てる。【全学年】
 【この業務項目において、葺合高校が設定する「16の力」のうち、育成を目指す力】
 ① ② ③ ④ ⑧ ⑨ ⑫ ⑬ ⑭ ⑯

(参照：研究報告書「VI 本年度の取組」)

- ・GS(グローバルスタディーズ)を履修することで、葺合高校が設定するグローバル人材に必要な「16の力」を育成するという仮説を立て実践した。この業務項目において、本校が育成を目指す力①②③④⑧⑨⑫⑬⑭⑯のどの分野も育っているが、特に①⑧⑫⑬⑭⑯においてはGSの授業がその成果に大きな影響を与えているといえる。また、対象生徒(国際科)の1、2、3年生を比較した場合、1年時以降に培われる項目の①と⑧で2、3年生に有意差が認められたことから、学年が上がると知識や思考力の積み上げが行なわれることが実証された。
- ・1年時のGSIAにおける「課題研究」については、国内外の社会問題を1つ取り上げて研究し、その後同様にフィリピンの問題を「人権」「環境」「経済」「教育」の4つの視点から分析し、解決策を提案した。
- ・1年時に培った力を、2・3年時のGSII BCとGSIII Cにおいて発展的に継続して①②③④⑧⑨⑫⑬⑭⑯の力を伸ばすことを目標に授業を行なった。

GSIII C選択者(44名)と非選択者(31名)を比較したところ、16の力の内

11 の項目において選択者の平均値の方が高い数値となった。総合的に考えて、GSIII の科目が 16 の力の育成をもたらしたと考えられる。

② 外部講師による授業やワークショップに参加する機会を設けることにより、専門的な知識の習得と思考力の育成を図る。【1年・2年】

【この業務項目において、葺合高校が設定する「16 の力」のうち、育成を目指す力】

① ② ⑧ ⑬

(参照：研究報告書「IV - 3 - 3 SGH の取組」「X 主な連携授業の記録」)

- ・各学年の GS 科目において、大学教授や企業・国際機関の方を外部講師として招き、講演やワークショップなどの連携授業を年間 18 回行い、そこでグローバル人材に必要な「16 の力」のうち、上記の①②⑧⑬の力を培うことを目標にした。その結果、外部講師の先生方の知見や技能を目の当たりにし、生徒たちの学びへの意欲が高まり、この業務項目において育成を目指す力①⑧⑬が伸びていることが検証された。
- ・フィリピンフィールドワークでは、Ateneo de Manila 大学の Dr. J. Cornelio による特別授業を事前に実施し、フィリピンの現状とその問題改善への取組について教えていただいた。フィールドワークに参加する生徒だけでなく、SGH 対象生徒全員が Dr. J. Cornelio の講義を通して、課題研究に対しての具体的な取組を各自が考える機会を持つことができた。

③ JICA や企業インターンシップへの参加により、能動的・主体的な実践力を育成する。

【1・2年】

【この業務項目において、葺合高校が設定する「16 の力」のうち、育成を目指す力】

① ② ③ ④ ⑦ ⑫ ⑬

(参照：研究報告書「IV - 3 - 3 SGH の取組」「VIII 課題研究コンテスト・発表会の取組」)

- ・生徒が学習によって得た知識やそれを基に構築した自己の意見を発信することで、理解をさらに深めると同時に、プレゼンテーション等のスキルを磨き、能動的・主体的な実践力を育成するために、これまでも生徒に様々なインターンシップや外部の活動等に参加することを推進してきた。今年度は、1年生2年生が JICA でのインターンシップに参加した。

④ 海外フィールドワークに向けての活動とフィールドワークの実践により、「人権」「環境」「経済」の観点から課題研究に取り組み、知識や思考力と実践力との融合を図る。【1年】

【この業務項目において、葺合高校が設定する「16 の力」のうち、育成を目指す力】

① ② ③ ④ ⑦ ⑪ ⑬ ⑭ ⑯

(参照：研究報告書「VII 国際協働学習の記録・海外連携校との連携 1～6」)

- ・フィールドワークは、事前準備、事後報告を含めて、そのなかで培われる力は計り知れず、参加者も自分の進路選択に大きく関わる体験であったと述べている。フィリピンへのフィールドワークでは、事前にフィリピンから Dr. Cornelio を招いてのワークショップ、課題研究に対する助言を通して、生徒は上記の力を育成する。さらに現地ではアテネオ デ マニラ大学の学生から研究発表に対する助言をもらい、英語で意見交換をする機会がある。一方マニラの最貧地域の家庭を訪問し、現地の人にインタビューしたり、NPO の活動を見学したりと、フィリピンを多角的な視野を持って体験する。上記の 16 の力のうち、⑪に関しては、フィールドワーク参加生徒だけが修得できる「力」であるが、本校の取組では、事後指導の一環として、その体験をまとめて他の生徒に発表させているが、それにより、参加していない生徒の力」の育成にも役立っていることがインタビューから明らかになった。

⑤ 課題研究を広げ深めることで、プランニング能力、問題解決能力、高いコミュニケーション能力、経験と知識を高次元で融合させる能力を育成する。【2年・3年】

【この業務項目において、葺合高校が設定する「16 の力」のうち、育成を目指す力】

① ② ③ ④ ⑦ ⑪ ⑬ ⑭ ⑯

(参照：研究報告書「資料 1 及び 2」、成果物(生徒論文集)、「四大陸サミット」冊子)

- ・論文作成では、国際感覚の育成とともに「リサーチスキル」「クリティカルシンキングスキル」「問題解決能力」「ライティング能力」の向上を目的とした。

- 論文の形式に従って書き進めさせ、随時、本校教員が助言と添削を重ねた。論文作成においては、生徒たちは積極的に関連団体にインタビューに行ったり、大学の先生方から助言を得たりしながら、調査・研究を進めた。

⑥ 各種コンテストへの積極的な参加を促すことにより、スキルのより一層の向上を図る。

【1年・2年】

【この業務項目において、葺合高校が設定する「16の力」のうち、育成を目指す力】

① ② ③ ④ ⑧ ⑨ ⑪ ⑬ ⑭ ⑯

(参照：研究報告書「IV-3-3 SGHの取組」、「四大陸サミット冊子」)

- 課外活動の一環として、校内外の課題研究コンテストや発表会に参加する(合計29回)ことで、目標を高く持ち、より高度なコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を身に付けた。さらに各自が設定した目標を達成することで大きな自信をつけることができた。
- 兵庫県高等学校英語ディベートコンテストでは、7年連続の優勝を勝ち取った。

⑦ 4大陸の姉妹校を訪れ、「世界の共生」のための提言のプレゼンテーションを行い、現地高校生と意見交換をする。さらに「四大陸高校生サミット」を開催し、姉妹校の生徒と議論して「共同宣言」を行う。【2年・3年】

【この業務項目において、葺合高校が設定する「16の力」のうち、育成を目指す力】

① ② ③ ⑧ ⑨ ⑭ ⑯

(参照：研究報告書「VII-6 プレサミットの取組」)

- 課題研究で導き出した自分たちの仮説を、海外の姉妹校等で発表・意見交換、現地でのフィールドワークを通して、さらに研究を深めた。
- 「第3回 KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」に向けて、提言ツアーや修学旅行でフェニックス校(スウェーデン)、ウェストボーングラマースクール(オーストラリア)、台中第一高級中学校(台湾)を訪問した際に「プレサミット」を開催し、「四大陸サミット」の成功につなげた。

⑧ 各種コンテスト・セミナーへ参加することで培ったスキルを、コンテスト等を主催する側に立つことによって一層の向上を図り、言語運用能力に加え、企画力や交渉力、実践力を磨き俯瞰的な視野を養うことでスーパーグローバルリーダーに必要な資質を高める。

【2年・3年】

【この業務項目において、葺合高校が設定する「16の力」のうち、育成を目指す力】

① ② ③ ⑧ ⑨ ⑭ ⑯

(参照：研究報告書III「第3回 KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」、「四大陸サミット冊子」)

- 海外の姉妹校及び連携校5校からそれぞれ生徒2名を本校に招待し、平成30年7月に「第3回 KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」を開催した。その準備として、事前に参加を依頼している姉妹校等と連絡を取り、インターネット掲示板を活用して事前にそれぞれのテーマに関して各国の課題や現状についての情報交換を行った。「サミット」では5つのテーマ毎に発表と討議を行ない、提案を共同宣言文にまとめた。
- 「第3回 KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」において、セレモニー関係は2年生、サミット本体では3年生が企画・運営し、その円滑な展開に大いに貢献した。
- 12月25日に開催した「SGH・SSH等課題研究交流発表会」では、GSS(Global Studies Society:GS)で学習した事柄を、課外活動として調査・研究を行う「委員会」に所属する生徒が中心となって、当日の流れの企画・運営を担当した。3回目の開催となった今年度は、参加校が7校(横浜サイエンスフロンティア高校、神戸市立科学技術高校、同六甲アイランド高校、同神港橋高校、兵庫県立神戸高校、同御影高校)となり、口頭発表、ポスター発表の他に、5つのテーマについて討議する時間をもうけた。日本語や英語で高校生の地域貢献やインターネット依存症について、学校の枠を超えて多くの高校生が意見交換をすることができた。
- SGH事業指定終了後の次年度以降も継続して開催し、課題研究及び各校生徒の交流の場として広げていく。
- 1月31日に実施した成果発表会においては、2年生が中心となって、ポスター発表やグルー

プ毎のディスカッション、全体報告会でのMCを勤め、その運営に貢献した。

- ・SGH 国際貢献活動の一つである Table for Two の取組では、生徒が考案したメニューを食堂が調理して販売した（セットメニュー697食、サラダ379食、スープ59食）。その売上の一部を、発展途上国の子供の学校給食の支援として寄付した。

⑨ 研究成果の普及

- ・NPO 活動での提言の実践
- ・普通科生徒への普及
- ・サミット記録冊子の送付
- ・課題研究交流会への市立高生徒の参加
- ・「神戸コミュニティーフォーラム」への参加
- ・中学生への課題研究発表会

- ・NPO 法人フキックス・コルプスの活動（参照：研究報告書X II 「NPO 法人フキックス・コルプス」の活動）

本校のSGH事業の取組において、高等学校での貴重な学びの機会を絶やすこと無く継承していくために、学校教育の枠を超えた人材育成を行うための会を設立し、学び取り組んだ課題研究での提言を実践する基盤として卒業生が運営するNPO法人を立ち上げ、卒業生・在校生の活動を支援することを目標に掲げた。具体的には、「KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」にて提言として出された計画を実現性のあるものとして高めるための支援組織として、学びや話し合い、これまで行ってきたフィリピン・フィールドワーク等を継続実施することで、さらなる人材育成を目指している。平成30年3月18日から行うフィリピン・フィールドワーク（1年生12名参加）において、第1期生で同フィールドワークに参加した卒業生2名が同行し、その活動を支援した。帰国後に、1年生のフィールドワークの振り返りと合わせて、同行者の支援に関してもフィードバックを行った。

平成30年8月11日に本校フェニックスホールにて第一回総会を行った。61名（会員11名、大学生29名、高校生18名、ミニ講師講師3名）の参加のもと、第1部：総会・フィリピンツアー報告・四大陸高校生サミット報告、第2部：発表・講演（OB大学生発表、高校生発表、ビジネス・国際協力分野関係者によるミニ講演）、第3部：テーマごとのグループ討議と全体発表、および、閉会後のネットワークミーティングを行った。

- ・平成30年5月11日に神戸市立中学校教育研究会英語部会教科総会の枠組みのなかで、「Super Global High School の取組」を題に、グローバル・リーダー育成の取組について研究発表を行った。
- ・平成30年8月に神戸市高等学校教育課程研究協議会全体会の枠組みのなかで、「葺合高等学校SGH5年間の取組」を題に、5年間のグローバル・リーダー育成の取組と、その成果と課題についての研究発表を行った。
- ・平成30年12月25日に「SGH・SSH等課題研究交流発表会」を開催し、横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校、神戸市立高等学校4校、近隣県立高校から約100名の高校生と32名の教員が参加し、課題研究の高等発表、ポスタープレゼンテーション、テーマ別のディスカッションを行った。テーマの広がりを感じ、研究方法も大いに学ぶところがあった。
- ・公益財団法人神戸国際協力交流センターが神戸市と連携し開催している「神戸コミュニティーフォーラム」に一昨年度から参加しているが、今年度はデザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）と連携し、フォーラムのキックオフプレゼンテーションにおけるテーマの提案やグループディスカッションの進行など、運営スタッフの一員として参加する機会を得た。

7 目標の進捗状況、成果、評価

<添付資料>

平成30年度 スーパーグローバルハイスクール研究報告書

(1) 成果目標について

(参照：研究報告書「V-3 目標設定シート」、文部科学省実施WEB 書面調査)

留学や海外の大学への進学等に関しては、その年の情勢や、各家庭の経済状況等の影響で必

ずしも伸びるとは限らないが、英語力や社会貢献に対する意識は SGH 対象生徒については目標を達成している。また SGH 対象以外の生徒についても着々と数値を増やしている。

1a 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数

自己研鑽活動として、各種「課題研究コンテスト・発表会」に参加（29回）、社会貢献活動としてユニセフの国際理解講座や小学生に英語を教える取組、募金活動他の取組を行った。SGH 対象生徒に関しては、在席数のほぼ全員が達成した。

また、社会貢献活動に関しては、普通科の参加生徒も増加している。

1b 自主的に留学または海外研究に行く生徒数

「トビタテ！留学 JAPAN」を利用して留学する生徒は今年度 8 名と増加した。SGH 対象生徒は SGH プログラムや神戸市のプログラムで海外の短期研修に参加する機会も多く、今年度はイオンワンパーセントクラブ アジアユースリーダーズ プログラムの 4 名が増え、101 名が海外へ行った。しかし経済的な負担も必要であり SGH 対象以外の生徒は一定数を超えない状況である。

1c 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合

SGH 対象生徒は昨年度に引き続きほぼ 90% 出会った。SGH 対象以外の生徒はでも 43% が将来留学したり海外で活躍したいと考えており、30 年度の達成目標に到達している。教育方針の一つである「世界の人たれ」の下、学校全体で国際理解教育を推進してきたこともその要因の一つである。

1e 卒業時における生徒の 4 技能の総合的な英語力として CEFR の B1～B2 レベルの生徒の割合

本校では CEFR の B2 レベルを英語検定準 1 級レベルと考え、目標値を英語検定準 1 級不合格 A レベル（CSE スコアー 2 まで）と考えている。さらに英語のコミュニケーション能力をはじめとする英語運用能力については、対象生徒の GTEC の結果、英語検定の結果や各種コンテストでの成果を検証し、99% が目標を達成している。

(2) グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標

a, d, f, h, i の項目に関しては、すでに設定目標値に達しており、b の項目に関しても在籍数ベースで考えると目標を達成しているといえる。d「課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ人数」の項目は、日本人の大学教員だけではなく、学校訪問に来られたアメリカの高校教員、大学生・大学院生及び海外フィールドワークでアテネオ デ マニラ大学の大学教員・大学生にも生徒の課題研究の発表を聞いていただき、延べ人数は 118 名になった。様々な助言をいただき、生徒にとって有意義な機会となっている。

(3) 中間評価を受けての取組

中間評価では、「神戸に即したローカルな課題への具体化」という助言をいただいた。そこで、連携企業・機関に神戸を拠点とする企業や神戸市役所との協力体制を昨年度より構築し、今年度もその強化を図った。現 2 年生の課題研究のテーマも、防災を始め、住みやすい環境づくりに向けた神戸市の取組や教育、労働環境についての調査研究において、「神戸」を地盤に進めていく生徒もでてきた。また今年度の四大陸サミットのテーマは“Grassroots activism by world citizens for our sustainable development”であり、政府や自治体への提言にとどまらず、高校生自身がどのように問題解決にむけて活動できるかを意識した取組となっている。

(4) SGH プログラムの検証 (参照: 研究報告書「V-2 SGH プログラムの検証」)

①経年比較と本年度の特長

SGH プログラムの成果を計る目的で、SGH 3期生(74名)とSGH1期生(一昨年度3年生77名)とSGH 2期生(昨年度3年生80名)のそれぞれの結果と比較した。1期生との比較においては15項目で3期生の平均値の方が高い値であり、9項目で差が確認された。2期生の場合、9項目で3期生の平均値の方が高く、2項目、「英語でのコミュニケーション能力」と「強いリーダーシップ」で差が確認された。2期生、3期生はSGH校に入学という意識も高く、教師側も前年度の反省を活かし、プログラムを実施することができたことが、2期生、3期生の平均値が1期生よりも全般的に高い結果だと考えられる。

t検定(p<0.05)で有意差のあるMAKSの項目 ○1期生◎1期生と2期生

人間力	ものごとを多くの角度から見る幅広い視野 ①	○
実践力	柔軟性に富んだ問題解決力 ②	○
人間/実践力	強いリーダーシップ ⑤	◎
実践/言語力	論理的思考力 ⑧	○
言語力	デジタルツールを多面的に使いこなす力 ⑨	○
実践力	自分の経験と学習した知識とを融合させて理解する能力 ⑩	○
言語力	英語でのコミュニケーション能力 ⑭	◎
言語力	英語でのプレゼンテーション能力 ⑯	○

②SGH 関連科目・行事の影響

SGH 科目や行事の影響(下記参照)について検証した。四大陸高校生サミットが3期生ともに、一番大きく影響を与えていた。大学教員など外部講師の講演やワークショップも影響があることが分かった。SGH 取組みの2年目からは、できるだけ多くの生徒に校内外においての課題研究発表を促した。その結果、ポスター発表を行った生徒が多く、課題研究の授業(GSIIB)やプレゼンテーション等を選んだ生徒が多いと考えられる。その他の内容から、自分で経験や体験したことが考え方や行動、進路、将来の目標に影響を与えることが分かった。

順位	1期生	人数	2期生	人数	3期生	人数
1	四大陸高校生サミット	46	四大陸高校生サミット	54	四大陸高校生サミット	50
2	GSIA-S	33	GSIIB	34	GSIIB	39
3	GSIA-E	27	大学教員・NPO・企業などによる講義	29	GSIA-S	26
4	大学教員・NPO・企業などによる講義	24	プレゼン発表・ポスターセッション	24	プレゼン発表・ポスターセッション	15
5	GSIIB	17	GSIA-S	20	GSIIC	14
6	中間発表(2年次)	14	その他*	15	大学教員・NPO・企業などによる講義	13
7	台中一中	12	GSIA-E	14	フィリピンフィールドワーク、GSIIC	12

*その他 ビジネスプラン(3) ディベート大会(2) GSS 活動 中間発表(2年次) 留学授業(CU、CE) 東北ボランティア フィラデルフィア派遣 クラス環境

③英語コミュニケーション能力 客観的評価

全学年対象に12月に実施したGTEC(Global Test of English Communication) for Studentを項目⑭「英語のコミュニケーション能力」を測る指標として活用した。3年生73名、2年生71名、1年生78名が受験した。

グレード	スコアガイドライン	3年 (人数)	2年 (人数)	1年 (人数)
7	大学での専門教育を英語で学べるレベル	34	22	10
6	海外進学を視野に入れることができるレベル	35	31	26
5	海外の高校の授業に参加できるレベル	4	16	38
4	海外ホームステイや語学研修で楽しめるレベル	1	1	4
平均点	平成 30 年度	698.8	670.5	615.8
	平成 29 年度	711.4	668.8	619.5
	平成 28 年度	700.0	689.0	613.0
	平成 27 年度		667.0	628.4
	平成 26 年度			619.1

GTEC 教師用帳票より

3年生の1年次の平均点は613点であり、85.8点の差があった。生徒自身も英語力が伸びたと実感しているが、客観的にもその向上が確認された。また、過去5年間のSGH対象生徒平均値と比較しても大きな差はなく、1年生と2年生においても英語力は確実に伸張しているといえる。

実用英語検定の取得状況は、各学年以下の通りである。平成31年度第3回まで

	3年	2年	1年	合計(人数)
1級	9	4	1	14
準1級	57	39	15	111
2級	72	74	69	215

④SGH対象生徒、非対象生徒間の比較検証

SGHのプログラムの波及効果を検証するために、SGH対象ではなかったH26年3月卒業生と、第3期SGH対象生徒を含めた平成31年3月卒業生に実施したアンケート、「将来は海外への留学をしたいと考えていますか。」「将来は仕事で国際的に活躍したいと考えていますか。」の2項目の結果を比較した。SGH指定以前も、国際科に関しては、留学希望が高く、実際多くの生徒が留学している。SGHプログラムにより、国際的に活躍したいと思う生徒が増えたと考えられる。時代のグローバル化の影響も考慮に入れる必要はあるが、普通科生徒への波及効果もあったと考えられる。

H26年3月卒業生 (SGH指定前)

科	系	将来留学希望	国際的に活躍
国際(75)		87.8% (65)	71.6% (53)
普通	英(37)	70.3% (26)	43.2% (16)
	理(35)	20.0% (7)	8.6% (3)
	文(115)	28.7% (33)	17.4% (20)

H31年3月卒業生 (SGH5年目)

科	系	将来留学希望	国際的に活躍
国際(73)		91.8% (67)	84.9% (62)
普通	英(71)	74.3% (52)	61.4% (43)
	理(37)	16.2% (8)	16.2% (6)
	文(158)	30.8% (48)	16.0% (25)

(5) その他の成果等

- ・帰国生徒・外国人生徒の受け入れ者数 (通年の留学生を含む)
(H 26年度 82人、27年度 72人、28年度 76人、29年度 65人、30年度 58人)
- ・本校の独自プログラムによる海外へのフィールドワークへの参加者数
(毎年 フィリピン12人、豪4人、米2人、スウェーデン/スコットランド/豪 20人)
- ・本校の独自プログラムによる海外の生徒の受け入れ

- ①本校が主催する国際会議：KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai
(毎年 台湾・フィリピン・スウェーデン・米・豪より 計10人)
- ②短期研修 (毎年 スウェーデン / スコットランド / オーストラリア 20人、
隔年 台湾 30人程度が本校でプレサミットを行う)
- ・海外での高校生国際会議への参加 イオンワンパーセントクラブ アジアユース プログラム
(H30年度 インドネシア 4人)
- ・国内での国際会議への参加のうち主なもの
 - ①ひょうご・こうべ 保健・医療ハイスクールサミット 31人 (H28年度)
 - ②防災世界こども会議 インドの高校生徒とのテレビ会議 8人 (H28年度)
 - ③京都大学主催「日本と東南アジアに共通の課題を考える高大連携国際ワークショップ」
15名 (H29年度)
- ・課題研究における主な受賞歴

SGH 甲子園 英語による口頭発表	優秀賞 (H28年度)
大阪大学 国際公共政策コンファレンス	優秀賞 (H28年度、H30年度)
兵庫県高校生英語ディベートコンテスト	優勝 (H26、27、28、29、30年度)
パラメンタリーディベート世界交流大会	準優勝 (H29年度)

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

SGH の取組の教育課程上の核となる教科として、指定初年度より学校設定教科グローバルスタディーズ (以下 GS) を創設した。GS においては、人文科学・社会科学分野の先進的な教育課程の開発、並びに実践を行うことを意図し、複数の教科で連携した授業や社会問題の解決を目指し生徒が主体的に学ぶ授業を実施している。知識を身につけることにとどまらず、課題研究、国際協働学習、社会貢献活動を3つの柱に、幅広く生徒の生きる力を培うことを目指してきた。生徒たちが、世界の問題を教室で学び知識や技能を身に付け、大学・企業・国際機関の専門家の方々から講義やワークショップを受けることで視野を広げ、さらに、海外の高校生と意見交換をし、共に考え、実際に体験することで考えを深め、未来に向かって行動することをめざす葺合高校独自の教科である。また GS の授業と連携し、補完し合う科目として「コンピュータリテラシー」「日本文化紹介」を設定している。GS 及び日本文化紹介は指定終了後も学校設定科目として存続させ取組を継続していく。

○科目構成

GS は国際科生徒が3年間を通じて学ぶ教科であり、その特徴から A・B・C の3つの分野に分かれる。知識型の GSA、ワークショップ・研究・インターンシップ・フィールドワークからなる実践型の GSB、ディベート・模擬国連参加などで学びを言語化し表現力をつけ、リーダーシップの素地を養うリーダー育成型の GSC から成り立つ。各学年で GSA, GSB, GSC の各科目が連携し、他の教科・科目が支えることで、生徒は効果的に知識や技能を身につけることができる。3学年にわたって、7種類、総計 12 単位である。

表1 教科グローバルスタディーズ

1 学年	GS I A (3 単位)、GS I B (1 単位)
2 学年	GS II A (1 単位)、GS II B (2 単位)、GS II C (選択：2 単位)
3 学年	GS III B (1 単位)、GS III C (選択：2 単位)

○各科目の特徴

① 1年時

(ア) GS I A

教育課程の特例措置として、「現代社会」より1単位を拠出し3単位で設定。地歴公民科、国語科、英語科教員が連携して担当し「世界の現状とは」をテーマに各教科の特性を生かした授業を展開している。

地歴公民分野 (GS I A-S) では世界の様々な地域、国々の現状を多角的な視点で学習する。国語分野 (GS I A-J) では論文を読む中で課題発見の方法や調査・研究の方法などについて学ぶ。英語分野 (GS I A-E) では地歴公民分野と連携しながら英語で学び、発表活動に繋げていく。2学期後半からは国語分野と連携して4人グループで研究テーマを決定しリサーチを進める。

(イ) GS I B (総合的な学習の時間)

産・官・学より講師を招き、講義・ワークショップ等を通して、様々な分野における知識を深め、多角的な視点から物事を分析する力を養う。また学年末に実施するフィリピンフィールドワークに向けアテネオ デ マニラ大学より講師を招聘し、事前研修を実施する。

(ウ) コンピュータリテラシー

教育課程の特例措置として、「情報の科学」より1単位を拠出し設定。GSにおける発表等の活動を支える科目とし、コンピュータの操作、インターネットによる情報収集の方法、文書作成法、プレゼンテーションソフトの活用法などについて学習する。

② 2年時

(ア) GS II A (総合的な学習の時間)

フィリピンフィールドワークの報告会、専門家の講義、課題研究への助言をもらうワークショップやディスカッション等を通して学習を深める。

(イ) GS II B

口答発表や英語論文作成を行う課題研究の中心科目である。リサーチペーパーの書き方に始まり、SDGsの17の目標より絞り込んだ5つの分野から、各自が関心のあるテーマを選び、課題研究に取り組み、論文作成を行う。国際協働学習として、次年度実施の「四大陸高校生サミット」に向けた参加各国へのSGH提言ツアーや台湾修学旅行時のプレゼンテーション・ディスカッション準備にも取り組む。

(ウ) GS II C (国際科選択科目)

地歴公民科教員、英語科教員、ALTによる英・日2カ国語のチーム・ティーチングである。地歴公民科教員主導の講義により知識を深め視野を広げた上で、英語科教員、ALT主導のプレゼンテーション・エッセイライティング・ディベート活動へと繋げていく。

(エ) 日本文化紹介

国語科・地歴公民科・芸術科(美術)・英語科・情報科教員が担当。日本の古典文化、美術や建築等に関するリサーチを行った後、日本語や英語でビデオの作成を行い、発表をする。

③ 3年時

(ア) GS III B (総合的な学習の時間)

「四大陸高校生サミット」に向けたプレゼンテーションの準備、企画・運営に関わる科

目。共同宣言の実現に向けて活動する。NPO 法人フキックス・コルプスの継続と運営にかかわる。

(イ) GSIII C (国際科選択科目)

「四大陸高校生サミット」に向けてプレゼンテーションの準備、企画・運営を行う。また、終了後、振り返りを実施し、記録冊子・ビデオの作成に取り組む。さらに姉妹校生徒、教員来校時の日本文化紹介を行う。

(2) 高大接続の状況について

①SGH の取組の中で、教科 GS のカリキュラムの中に、大学・企業・国際機関・NPO の専門家の講義やワークショップ、国内外でのフィールドワーク、国内外の高校生との討議や課題研究の発表会への参加等の体験的学習を位置付けた取組を行ってきた。そうした中で大学との学びのネットワークが広がってきた。

以下は課題研究等の取組において連携を行っている大学である。

神戸市外国語大学、神戸大学、兵庫教育大学、大阪大学、京都大学、大阪府立大学、兵庫県立大学、関西学院大学、アテネオ デ マニラ大学 等

また、以下は大学教員及び学生と協働した課題研究に関する取組に参加した生徒数（のべ人数）である。

大学教員及び学生と協働した取組（H 26 年度 47 人、27 年度 42 人、28 年度 25 人、29 年度 79 人、30 年度 118 人、神戸市外大、阪大、関学大等の教員による講演、課題研究のワークショップ）

②神戸市は神戸大学(平成 25 年～)、神戸学院大学(平成 27 年～)、甲南大学（平成 28 年～）と包括連携に関する協定書を交わしており、包括協定の中で大学教育の先取り履修等に向けた連携についても、今後とも協議を行っていきたいと考えている。

③神戸研究学園都市大学交流推進協議会（神戸芸術工科大学、神戸市外国語大学、兵庫県立大学、流通科学大学、神戸市立工業高等専門学校が加盟）主催の高大連携講座が開かれているが、こうした制度も積極的に活用していきたい。

(3) 生徒の変化について（詳細：研究報告書「V - 4 生徒の変容」）

生徒は SDGs について学び、問題を発見し、現状を分析し、改善に向けての方策を考えてきた。課題研究の取組において徐々に論理的思考力が育まれ、自ら課題を解決しようとする主体性が育まれてきた。そして、自問自答を重ね、クラスメイトとの議論や教員との意見交換を行なう中で、対話力が培われ、地球規模の課題を共に取り組む姿勢が生まれてきた。また日本語と英語によるプレゼンテーション能力が、経験を積む毎に伸びている。GS では英語でのデータ収集・分析・発表・意見交換など英語を使用する場面が多く、必然的に様々な英語に触れる機会が増え、その結果英語力を高めている。具体的には実用英語検定準 1 級を、2 年生終了時には学年 80 名の生徒の半数が取得、卒業時には約 4 分の 3 の生徒が取得している。直接海外に赴き、現地の実情を見たいという積極的な生徒も多く、平成 30 年度は 8 名の生徒が「トビタテ！留学 JAPAN」に選抜された。コスタリカへ動物保護活動の研修に行ったり、アルゼンチンで人権保護団体の活動に参加したりしている。そして、このようなクラスメイトや上級生の頑張りに刺激を受けるなど、コミュニティとしても学び合う文化が育ってきている。

「課題研究が大学の進路選択に影響を与えた生徒」は 90%を超えている。自分の興味関心や

問題意識の方向が明確になり、高等教育で更に知識や技術を身につけ、研究を続けたいと考えているからだと思われる。

(4) 教師の変化について (詳細：研究報告書「V - 5 教員・学校の変容」)

SGH の取組や課題研究を指導する教師も、指定当初はどの様に課題研究に取り組みばよいものかと戸惑い、悩みながらも生徒の傍らで耳を傾けた大学教授の講義や教員対象の研修会、他校とともに参加する発表会などで研鑽を積んできた。その過程で、知見を得て、本校が掲げる MAKS16 の力の育成を念頭に置いて指導法、評価を考えることができるようになり、生徒のお学びに寄り添いながら少しずつ自信を持って取り組めるようになってきたといえる。また、SGH のこうした取組の中で生徒の力が伸張してきたこと、教師自身に変容が見られたことは、教員アンケートの質問 1 「SGH の取組を通して、MAKS16 の力に関して、生徒の意識に変容が見られたか」、質問 2 「SGH の取組を通して、教員の意識・取組に変容が見られたか」の問いに対し、どちらも肯定的な回答が 85%以上であることから見ても明らかである。

しかし一方で、教員アンケートにおける質問 3 「SGH の取組を通して、学校全体に変容が見られたか」の問いに対する肯定的な回答は 52%にとどまり、課題が残る形となった。これは SGH の対象生徒が各学年 2 クラス 80 名のみであり、授業やそれ以外で直接生徒と関わり指導を行う教員がどうしても限られてしまうこと、また、課題研究の指導法や授業の構成とその評価法については実際に指導に関わりながらでなければ、単に研修等を受けるだけでは理解と実践には不十分な面もある。しかしながら新学習指導要領への移行の中で、本校も次年度より全学年で「総合的な探究の時間」で探究活動を行うこととなる。そのときこそ、この 5 年間の SGH 事業の取組で得た知見を学校全体の中で、生かしていかななくてはならない。

(5) 学校における他の要素の変化について (授業、保護者等)

① 授業等の変化

生徒の成長と共に本校にとっても、持続可能な社会の発展を目指してグローバル人材を育成するための 3 つの進展があった。まず、学校設定教科 GS の確立である。指導内容や指導法も少しずつ充実してきている。2 点目は学びのネットワークの構築である。大学・神戸市役所・企業・国際機関・NPO などと連携することが可能になり、ワークショップ・インターンシップなどを本校の生徒のニーズに合わせて開催し、生徒が社会に目を向け、課題研究を進めるための多くの機会を作ることができた。3 点目は、体験的な学習をカリキュラムに位置づけた取組の拡大である。課題研究発表会での国内の学校との意見交換、「KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」に向けた海外でのフィールドワーク提言ツアー、プレサミットなどを通して国内外の学校等との協働学習も定着してきている。

② 保護者の評価と変容 (詳細：研究報告書「V - 5 保護者の変容」)

各学年国際科生徒の保護者を対象に 1 月にアンケートを行った。以下、特に顕著なものを取り上げる

- ・ 3 学年の保護者で SGH の取組のプラスの影響を認める率が他学年より高く、2 年次の中間発表会や 3 年次の四大陸高校生サミットの取組を通じて、子供の成長を実感していることがうかがえる。
- ・ SGH のどの取組に関心があるかとの問いでは、2 学年・3 学年ともに「課題研究への取組」が目立って多く、2 年次から本格的に取り組む課題研究が家庭においても子供の変

化として実感を持ってとらえられていることがよくわかる。

- ・子供が将来グローバル人材として活躍することを期待しているかとも問いでは、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」がどの学年でも合計90%前後となっている。

「どの様な道を歩むかは本人次第である」との意見も目立ち、期待はしつつも子供を束縛したくはないとの親の心情もうかがえる。

全体を総じて見ると、SGHの取り組みによって保護者が子供の成長を実感し、子供の将来への期待を大きく持っていることがわかる。特に1年生の保護者からはこれからもSGHに相当する活動を積極的に継続してほしいとの声も多く、SGHでの取り組みが高く評価されており、それが3年間を通して維持されているのではないだろうか。

(6) 課題や問題点について

① 研究開発・実践の過程で生じた課題

初年度、探究活動・課題研究については担当教員にあまり指導経験がなかった。そこで、探究活動の研究会に参加したり、大学の先生方に教員への研修や生徒へのワークショップをお願いしたり、大学で開催される課題研究の勉強会(例：大阪大学 **Future Global Leaders Camp**, 関西学院世界市民明石塾)に意欲のある生徒の参加を促したり、生徒たちの発表会に出向き、専門家から出される講評を指導の参考にしてきた。生徒より数歩前を歩きながら、生徒の躓きを見て、次の指導を考える初年度であった。生徒の成長に応じて、どの時点で何をどのように教え、どう力をつけさせるのがよいのか、個々の生徒の理解度と進捗状況に応じて、同じ科目を教える教員で毎週議論をしてきた。生徒が書く振り返りやポートフォリオにコメントを返したり、相談にのったりしながら、背景となるデータの検索、先行研究調べ、各自の研究方法、リサーチクエッション、仮説に対峙してきた。

1年目の生徒の成果物(英語論文、英語ポスター)を2年目の生徒の土台にし、2年目の生徒の成果物から3年目の生徒が学び合うことで、徐々に安定した研究になってきたようである。特に本校は英語でのポスター発表、論文作成を義務付けていたため、日本語で深まっていないのに、それを英語で表現することで、さらに内容の薄いものになっていた。2年目以降徐々に内容を大切に、生徒が情報を集めるために **CiNii** や **Google Scholar** を利用して先行研究として英語の論文を読む機会を増やした。また、質疑応答の機会を増やすことで、発表する立場と同時に、聞く立場を考えることもでき、グループで講評する際にも、互いに励まし合って、問題点を共有していいものにするという姿勢が出てきたように思う。英文を読んだり書いたりする力がついてくると、課題研究の意欲も高まり、一定の表現を学び、借用しながら、書けるようになってきた。課題研究の指導に関しては、形式を学べば完成ではなく、世界の問題に関心を持ちながら、知見を広げなければならず、奥が深い。

課題研究の指導方法を学校全体の広げることは困難であった。「課題研究とは何か」「生徒が段階的につける力はどのような力か」「生徒が躓きやすいところはどこか」について、課題研究の指導を直接行っている教員以外は、あまり考える機会がなかったため、教員全体、学校全体には探究学習の指導がうまく広がらなかった。また校内・校外で行われる課題研究の発表会では、高校生・大学生の優れた口頭発表・ポスター発表を見ることができのだが、教員側の多忙のため、案内しても教員の参加者が広がらないという現状もある。生徒が2年生になった時点で、課題研究の発表は英語としてしまったため、多くの他教科

の教員への伝達が困難になったことも一因であると思われる。

②SGH の取組の報告、普及の不十分さ等の問題点

SGH の目的や成果、現在取り組んでいること、さらに今後の計画などを、生徒、教員、保護者、他の SGH 校などに広く知ってもらえる方法として、口頭説明、プリント配布、HP への掲載などの方法があったが、説明や報告が十分であったとはいえない。入学時の説明、国際科集会、四大陸高校生サミット、成果発表会その他活動や取組を SGH 委員会のメンバー（18 名）には、比較的伝えることができていたが、1・2 年目には行われていた全職員への報告は忙しさゆえに徐々に少なくなっていた。保護者に対しても、もう少し頻りに説明プリントの配布を行うべきだったかと思う。WEB 上の報告も更新頻度をもう少し増やすべきであった。役割分担の徹底が十分にできていなかったことが反省点である。

(7) 今後の持続可能性について

①海外フィールドワーク、国際会議の実施について

5 年間に培ってきた取組を精査し、継続・発展させる部分を明確にしていく必要がある。社会問題や国際問題に意欲のある生徒たちの課題研究についての発表を支え助言を与えてきた GSS（グローバルスタディーズ研究会）は門戸を普通科にも広げ、取組を進めていく体制をとりたい。指導者はチームを作り、過重労働にならないように配慮したい。

生徒のフィールドワークの費用については、受益者負担（生徒負担）とする、同窓会より一部援助を得るなどの方策を考えた上で継続する、または skype を使ったテレビ会議やオンラインでの掲示板への書き込みという形で続けるのかの検討・調整を図る。

アメリカ、ヨーロッパ、オセアニア、アジアの 4 大陸の姉妹校生徒を招待し、3 年間続けてきた「四大陸高校生サミット」は「インターナショナル・コンファレンス」と名前を変え、海外から高校生を招き、関西の大学大学院への留学生などの参加を得て、続ける予定である。その来日費用については相手校との調整を図っていく。（平成 31 年度分の招聘費用については神戸市教育委員会で計上し、審議中である）

②学校設定教科科目について

(ア) グローバル・スタディーズ (GS) について

国際科は、SGH の時の学校設定科目の中で、GS I A の S 地歴公民（1 単位）は教育課程の特例措置として設定していたため現代社会に戻し、また J 国語（1 単位）は国語総合に戻すこととするが、今後の高校教育の目指すものや高大接続の可能性を鑑みて、この 5 年間で培ってきた、論理的思考力を育成する力、多角的や視野を育成する指導、また課題研究の基礎を身につける指導などを GS I A（国際科専門科目：1 単位）、GS I B（総合的な探究の時間：1 単位）を利用して行い、地歴公民分野及び国語分野の指導に関してはカリキュラムマネジメントの視点から、教科横断的な取組としてサポートしていく。

教科 GS 科目構成 (SGH 指定時)

1 学年	GS I A(3 単位)、GS I B(1 単位)
2 学年	GS II A(1 単位)、GS II B(2 単位) GS II C(選択：2 単位)
3 学年	GS III B(1 単位)、 GS III C(選択：2 単位)

⇒

教科 GS 科目構成 (SGH 指定指定終了後)

1 学年	GS I A(1 単位)、GS I B(1 単位)
2 学年	GS II A(1 単位)、GS II B(2 単位) GS II C(選択：2 単位)
3 学年	GS III B(1 単位)、 GS III C(選択：2 単位)

(イ) その他の科目

1年次設定の「コンピュータリテラシー」(1単位)は教育課程の特例措置を受けていたため「情報の科学」に戻すが、カリキュラムマネジメントの視点から、教科横断的な取組としてサポートしていく。

2年次選択科目の「日本文化紹介」は継続して国際科選択科目として設定する。

③課題研究の取組について

上記GSの項目でも述べたが、国際科においては教科GSにおいて取り扱う。また普通科においては「総合的な探究の時間」を活用し、SGHの取組で得た知見、指導方法を活用しつつ、日本語または英語での探究活動を行っていく予定である。そのためにも、この5年間のSGHの取組で得たものを職員研修やOJT等通じて教員間で共有し、学校全体で取り組んでいきたい。

【担当者】

担当課	神戸市教育委員会事務局 学校教育課	T E L	078(322)6447
氏 名	福 岡 浩 明	F A X	078(322)6143
職 名	指 導 主 事	e-mail	hiroaki_fukuoka2@office.city.kobe.lg.jp